「グローバルコンピテンシー」の育成をめざす中学校における「探究」学習

― テーマ研究・「中東・イスラーム地域研究：パレスチナってどのような地域・「国」」を事例として ―

東京学芸大学附属世田谷中学校　　秋　山　寿　彦

目　　次

1．「グローバルコンピテンシー（以下：GC）」の捉え方 …… 82

2．中東，イスラーム（イスラム教），「パレスチナ問題」からアプローチを試みる「GC」 育成 …… 83

3．テーマ研究：中東・イスラーム地域研究・「パレスチナってどのような地域・「国」？」の実践 …… 86

4．「中東・イスラーム研究　～パレスチナってどのような地域・「国」～」の学習内容構成と学習展開 …… 87

5．新聞への意見投書と「オリエント世界」作文を手がかりとした中学生のパレスチナ，
　イスラームに関する理解と認識からアプローチする「GC」 …… 89

おわりに　本研究の成果と課題 …… 90

東京学芸大学附属学校　研究紀要　第 46 集

「グローバルコンピテンシー」の育成をめざす中学校における「探究」学習

― テーマ研究・「中東・イスラーム地域研究：パレスチナってどのような地域・「国」」を事例として ―

東京学芸大学附属世田谷中学校　　秋　山　寿　彦

1．「グローバルコンピテンシー（以下：GC）」の捉え方

学習指導要領の改訂にともない，資質・能力の育成のベースとなる「21世紀型スキル」やコンピテンシーを重視する学習が次世代に対する学校教育のキーワードとなっている。

とりわけ，OECD（経済協力開発機構）とアメリカ・アジアンソサイエティは，「グローバルコンピテンス（国際的な課題に対する理解や文化的多様性・寛容性に対する態度　以下：GC）」を2018年の「生徒の国際学習到達度調査（以下：PISA）」で新たに評価することを計画し，獲得した知識を活用していく力や異なる環境においても開かれた心で柔軟に対応する方略を探究し，異文化を背景に有する相手との関係性を構築していく力を測定，評価することに新たに取り組み始めたが，日本においては，文部科学省は実施を延期した。

OECD 教育・スキル局長，アンドレアス・シュライヒャーは，「GC」の育成が必要な理由として，2018年３月，東京大学公共政策大学院主催による国際シンポジウム「グローバルコンピテンスと次世代の学び」において「多文化コミュニティーの中で調和しながら生きていくために」，「変化する労働市場で力強く成功するために」「メディアプラットフォームを効果的に，責任を持って利用するために」，「持続可能な開発の目標を支援するために」という４点をあげている。

また，「GC」の育成に関しては，これまで，スーパーグローバルハイスクール（以下：SGH）及び高大連携教育を視野にとらえた後期中等教育（高等学校）が取り組んでいく課題としてとらえられている。

しかし，「グローバルコンピテンシー」が OECD，PISA において，次のように定義されていることを鑑みると，

> グローバルで多文化的な課題を批判的に多様な視点から分析する力であり，自己や他者の知覚や判断，考え方にどのような相違があるかを理解する力であり，人間的な尊厳のために互いに尊重しながら多様な背景から開かれた適切かつ効果的な他者との相互作用に関わる力である。　　＜ OECD　2016年＞
>
> 「グローバル・コンピテンス」とは
>
> ①　地域，グローバル化そして異文化の問題を考察すること
>
> ②　他者の視点と世界観を理解し，その価値を認めること
>
> ③　異文化の人々と，オープンに適切かつ実効性のある意思の疎通を行うこと
>
> ④　生徒の「健やかさ・幸福度（well-being）と持続可能な発展のために行動を起こすこと」　＜ PISA ＞

一部の「グローバル人材」を志向する生徒だけを対象とする資質・能力ではなくすべての学習者に不可欠なものである。小中学校においても各学校段階及び児童生徒の発達特性に応じて，「グローバルコンピテンシー」の基礎を形成していく学びを，これからの社会科をはじめとする各教科・総合的な学習・特別活動において位置づけていくことが必要であると考えられる。

PISA においては「GC」を測定，評価するためにアンケート形式で，生徒が「自己評価」に取り組んでいくために次の4つの観点を設定している。

①「グローバルな問題」に関する知識と認識
　グローバルな問題や異文化間の問題に関する知識と理解を自己評価する。
②「グローバルな環境でのコミュニケーション力」
　相手に敬意を示し，良好なコミュニケーションが可能か。何カ国語でどの程度会話ができるか。そして，コミュニケーションに困難がある場合，どのように乗り越えるか。
③「グローバルな環境での柔軟な対応力」
　異なった文化，経験したことのない状況や環境に置かれたときの対応力や「カルチュアーショック」がもたらすストレスをどの程度まで柔軟に受け止めることができるか。
④「「グローバルな問題」に対して公平な判断ができ，共感することができるか。」
　他者の心情や体験を共感的に理解することができるか。異なる文化に対する心理的バリアーを低くし，他者と円滑にコミュニケーションすることができるか。

このように定義され，測定・評価が試みられていく「GC」育成をねらいとして試みた「総合的な学習の時間」の授業枠におけるイスラームとパレスチナ問題に焦点を当てた「テーマ研究：中東・イスラーム地域研究」の授業実践に即して，「GC」育成の意義と課題を明らかにする。

２．中東，イスラーム（イスラム教），「パレスチナ問題」からアプローチを試みる「GC」 育成

（1）「GC」の基盤となる学習コンテンツとしての現代世界における中東，イスラームと日本のかかわりに関する捉え方

多くの日本人にとって，イスラーム世界を自分の生活に引きつけて意識することとなった契機が，1973年のエジプトを中心としたアラブ諸国とパレスチナ・ヨルダン川西岸・シナイ半島の占領を続けていたイスラエルと第4次中東戦争によって引き起こされた石油ショックであった。石けん，トイレットペーパーがスーパーマーケットをはじめとする身近な商店で購入できなくなり，テレビの深夜番組の放送が中止されたり，イルミネーションやエレベーターの使用制限等により，ムスリムが多数を占める中東の産油地域と自分の生活とのつながりを意識することとなった。しかし，この意識は，「アラブの油」という言葉が端的に表すように，イスラーム理解というよりも資源・エネルギー確保という点に目がむけられたという特色が見られる。この時，日本政府のアラブ諸国に対する援助により，エジプトアラブ共和国のカイロ大学文学部に日本語学科が創設され，イサム・ハムザ（日本近代史研究）やアハマド・ファトヒ（現代日本文学研究）をはじめとする優れた日本研究者を輩出することとなった。

イスラーム復興，イスラーム主義が可視化された歴史的できごとが，シーア派指導者であったアヤトラ・ホメイニ師が主導した1979年のイラン・イスーラム革命だった。アメリカ合衆国とソビエト連邦による東西冷戦の真っ直中であったこの時期，ソ連によるアフガニスタン介入が，後に，ターリバンやオサマ・ビン・ラディンを指導者とするアル・カーイダを生み出す原因となった。当初，日本においては，20世紀の後半を迎えていたにも関わらずイスラームという宗教が国家や政治を動かすという側面に着目し，中東・イスラーム世界が中世へと回帰，復古しているという「歴史の逆回転」との評価もなされた。アメリカの支援を受けて1980 ～ 1989年のイランとの戦争を戦ったイラクのサダム・フセインによる1990年のクウェートへの侵攻によって勃発した湾岸戦争は，日本の国際協力・貢献のあり方が問われ，自衛隊を PKO へ派遣する契機となった。このとき，サダム・フセインは，クウェート侵攻とイスラエルによるパレスチナ占領をリンクさせる主張をおこない，パレスチナ解放機構（PLO）のヤセル・アラファトは，湾岸戦争でイラクを支持する立場を取り，1993年のオスロ合意，ビル・クリントンの仲介によるキャンプデービッド会談に至るまで国際社会で苦境に立つこととなった。

2001年9月11日に起こったアメリカ合衆国の中枢都市，ニューヨーク・ワシントンでの「同時多発テロ事件」

をきっかけとして，国家間の戦争とは異なる「非対称」な戦いでありながら「テロとの戦争」という主張がなされることとなり，アフガニスタン戦争，2003年のイラク戦争へとアメリカ合衆国を中心とする国際社会は突き進み，世界の約４分の１の人々が信仰するイスラームを，テロや暴力と安直に結びつける傾向が顕在化した。

オスロ合意によって，イスラエルとパレスチナの二国家共存の取り決めがなされ，ヨルダン川西岸及びガザによって構成されるパレスチナ自治政府が発足しても，国際的に違法とみなされるイスラエルによる占領地への入植及びパレスチナ人の権利や生活状況の改善は，十分とは到底言い難い状況が続いている。こうした状況下でパレスチナ人がとったインティファーダと呼ばれる抗議・抵抗の行動もイスラエルからは「テロ」として括られる。2005年の自治政府の選挙以降，ガザ地区を実効支配するイスラム主義組織・ハマスの影響を受けた自爆攻撃やイスラエルに対するミサイルやロケット攻撃が起きているが，これに対するイスラエルの報復による住宅や学校，女性や子どもにに対する破壊や犠牲と，ハマスによる軍事的行動がイスラエルにもたらす被害との間には明らかな「非対称性」が認められる。こうした中で，イスラエル建国70年＝パレスチナにとってのナクバ（大災厄）となる2018年，トランプ米大統領はエルサレムを首都と認定し，大使館を移した。

（2）テーマ研究：中東・イスラーム研究～パレスチナってどのような地域・「国」～に取り組む中学生と中学校社会科学習における中東・イスラームの取り扱い

2018年に中東・イスラーム研究に取り組んだ中学２・３年生が生まれたのは，2003～2005年であり，上記の①で述べたことは，多くの中学生が，生まれる以前の直接は知らない「歴史的なできごと」と認識している。

現在の中学生にとっての中東・イスラーム世界との出会いや認識に，イラク・シリアにおける2014年6月の「イスラム国（IS)」の誕生をめぐる問題と2015年11月の「シャルリー・エブド襲撃事件」をはじめとするイスラーム主義を標榜するテロ事件が大きな影響を与えている。とりわけ，テレビや新聞からの情報に依拠して，「イスラム国」を，イスラーム信仰のメインストリーム（主潮流）と思い込んだイスラームに対する一面的な捉え方が顕著に見られる。「イスラム国」だけを指標とするならば，日本の中学生にとって，イスラームは依然として「遠くにある」,「理解が難しい」テーマといってもよいが，コンビニエンスストアやファストフード店で働く人々，訪日外国人観光客に目をむけるならば，ムスリムの姿を身近に発見することができるようになってきている。板垣雄三が,「イスラーム　わが隣人」と2000年に雑誌「世界」（岩波書店）で指摘したことが今日の日本社会で現実のものとなっていることに中学生も気がつき始めている。

テーマ研究：中東・イスラーム研究を選択した20名の生徒が記述した理由を集約した以下の10点の中にはイスラームを，教義が厳しく，暴力的・攻撃的で怖く，女性差別の側面を記述したステレオタイプのイスラーム・イメージが見られる。同時に，イスラームやパレスチナに関して中学校の社会科の授業では，多くの時間を取って指導することが現実的には難しいことやイスラームやパレスチナと実際に出会う体験的学習が設定されていないという社会科の課題が見えてくる。

・日本から遠くにあるパレスチナやイスラエルには家族旅行などでも行くことはなさそうだし，社会科の授業でもあまり深く勉強しない場所だから。
・1日にお祈りを5回もしたり，豚肉を食べてはいけないとか，酒を飲んではいけない，断食をするという厳しいルールなのにどうして多くの人々がイスラム教を信じているのかということを知りたい。
・スカーフを被る，自動車の運転を認めない，サッカーの試合観戦したり，映画やコンサートに行けないなど女性を差別するような教えが含まれていることをイスラム教徒の女性はどう考えているのでしょう。
・イスラム教は，テロや暴力とつながる危険な面をもつ宗教なのだろうか。
・「イスラム国」の教えや考えがイラクやシリアでどうして広がったのか知りたい。

・ユダヤ教，キリスト教，イスラム教の聖地であるエルサレムってどのような町なのかを知りたいし，また，どうしてエルサレムをめぐって争いが続いているのか知りたい。特に，トランプ大統領が，大使館をエルサレムに移すと言っている理由も知りたい。
・国連の公用語になっているけれどアラビア語ってどんな言葉か全く知らないので興味がある。
・モスクに行って，実際にお祈りを見たり，イスラム教徒の人と話をしてみたいと思っていたから。
・これまで食べたことがないパレスチナ料理のレストランに行くということやパレスチナ料理を作ってみるという説明を聞いたので。
・パレスチナ大使館の人から直接，お話しを聞いて一緒に勉強できるから。

イスラームについて中学校の社会科学習においては，地理的分野では，「世界各地の人々の生活と環境」で，礼拝・断食・飲食の規定や女性の服装というイスラームの教えの基本に関わる事項を取り上げている。しかし，イスラームが誕生したアラビア半島を中心とする西アジア・中東地域だけではなく，広くアジア地域においてインドネシア・インド・マレーシア・シンガポールを中心として，それぞれの国・地域の特色とともに多くのムスリムが多様な生活を営んでいることを記述する教科書は少ない。

また，北アフリカやシリア・イラクから地中海やトルコを経由して多くのムスリム移民，難民がヨーロッパ（EU）諸国に流入していることに伴って生じている「イスラムフォビア（嫌悪）」は，まだ取り上げられていない。また，ユダヤ教やユダヤ教徒に対するヨーロッパ諸国で起こった差別については，歴史的分野における第2次世界大戦の始まりと拡大で，ヒトラーによるホロコーストを除いてこれまで全く取り上げられていない。EU諸国は，多様性や自由と平等を尊重する寛容で，平和的，普遍的な価値観に基づく共同体を形成し，日本にとってこれまで重要な参照枠であった。しかし，イスラームを参照枠としてヨーロッパについての地理学習に取り入れることにより，イスラーム世界を「リスク」や「亀裂」と「分断」を生み出す要因の一つであるとするEU側の「暗黙の共通認識」を照射することが可能になる。ムスリム移民の受け入れに反対する排外的なナショナリズムに支えられた「ドイツのための選択」や「国民戦線」をはじめとする「自国第一主義」の流れがヨーロッパで勢力を伸ばしている現在の世界を対象化し，多様性の意義と持続可能な発展をとらえることをねらいとする地理学習を志向し，指導計画におけるイスラームの位置づけを工夫，検討していくことがもとめられる。

歴史的分野では，改訂学習指導要領で，「モンゴル帝国の拡大と元寇」の学習を，モンゴル帝国（元）と日本及び朝鮮半島だけに限らず，ムスリム商人の活動という視点から世界史の動きの一貫に位置づけていくことが示されたことに注目したい。同時に，仏教・キリスト教のおこりと並列して扱われるイスラームの誕生については，ムハンマドに焦点を当て，その広がりというキリスト教以外の一神教への視座を視野にとらえた学習を展開するなかで，古代中東地域でのユダヤ教の広まりと影響を取り扱うことも試みたい。更に，「遣唐使がもたらした天平文化」においても，「シルクロード」を通じての交流として正倉院御物を取り上げるだけではなく，イラク戦争の影響により現代世界では，不安定で国土が荒廃したイメージだけでとらえがちなバグダッドを都としたイスラーム帝国が文化的多様性を認めることを基盤として繁栄した「世界帝国」であることを取り上げたい。イスラーム帝国が数学・天文学・化学を生み出し，古代ギリシア哲学をアラビア語に翻訳し，ヨーロッパに伝えたこととともに「千夜一夜物語（アラビアンナイト）」の読み解きを通して，アラジンが中国で生まれた話であり，イスラーム帝国では，「背中にこぶのある男」の話を資料としてムスリムとキリスト教徒・ユダヤ教徒が共存していた歴史的事実に気づかせたい。

公民的分野における「人間の尊重と基本的人権の尊重」の学習においては，近代ヨーロッパの市民革命の成果で，基本的人権の核心を構成する自由や平等について，デンマークにおける「ミートボール論争」やフランスにおける「ヘジャーブ着用禁止問題」を取り上げ，グローバル化が加速する現代社会において，イスラームとの共

存・共生に焦点を当てることにより普遍的な人権概念，権利を多面的多角的にとらえていくことを試みたい。

21世紀におけるグローバルな問題は，2030年をゴールとし「誰一人取り残さない」という2015年の国連総会での決議に基づくSDGs（持続可能な開発ための目標）に示されている１７の目標に集約される。貧困，飢餓，温暖化を中心とする気候変動，質の高い教育，安全な水やトイレ，公正，不平等，経済成長，産業と技術革新等とともにUNESCOがその設立にあたり「平和の砦」を人々の心に築くことの意義を示しているように平和を巡る問題の重要性が今，改めて取り扱うことがもとめられる。ただ，平和問題に関しては，日本が戦争における唯一の被爆国であるという歴史の重みを踏まえて核兵器の不拡散と禁止をめぐる問題に指導の力点が置かれ，中学校においてパレスチナ問題を取り扱うことが十分にはできていない。

このような中学校社会科における中東・イスラーム世界をめぐる取り扱いの現状を踏まえ，「GC」育成を中心的なねらいとする「探究」学習として，「中東・イスラーム地域研究～パレスチナってどのような地域・「国」？」の実践を「テーマ研究」の時間枠で試みた。

３．テーマ研究：中東・イスラーム地域研究・「パレスチナってどのような地域・「国」？」の実践

（1）学習のねらい

・世界で約17億人の人々が信仰するイスラームの教えや中東地域の主要言語であるアラビア語に触れ，中東・イスラーム地域に対する理解を深める。

・パレスチナに焦点を当て，中東の人々の生活や考え方を，イスラームを中心とする宗教・料理や食べ物・映画・音楽から多面的に理解する。

・エルサレムへのアメリカ大使館移転問題，パレスチナに建設された分離壁やガザ地域における抵抗運動等のパレスチナ・中東地域に関する新聞記事を中心とする資料を集め，今，パレスチナ・イスラーム地域で起こっている問題に関心を持つ。

・パレスチナに関わる支援活動に取り組む日本人の姿から国際協力・ボランティア活動に対する関心と理解を深める。

・エルサレム「首都」認定問題をはじめとする国際連合安全保障理事会における決議をめぐるパレスチナとイスラエル・アメリカの対立を多面的多角的にとらえ，「パレスチナ問題」に対して自分にできることを考え，提言としてまとめる。

（2）「探究」的な学びを実現していく方策

ⅰ　資料・情報の収集，調査活動に取り組むことができる学習環境の整備

日本の新聞やテレビで，イスラームやパレスチナについて取り上げられるニュースは欧米メディアと比較するとその頻度は非常に限定的なものとなっている。しかし，今年度は，トランプ米大統領が就任した当初から国際連合の安全保障理事会の決議を無視するかたちで5月に，大使館をエルサレムに移し，首都として認定するという問題が大きく報じられていたことを手がかりとして，生徒自身が新聞記事を収集，分析する活動を取り入れた。

また，中東・イスラーム地域及びパレスチナに関する新書，概説書を中心とした学習テーマの設定及び調査活動に必要となる基礎的文献をテーマ研究の活動教室で常時，生徒が書架から手に取ることができように学習環境を整えた。校内の掲示板にも，パレスチナフェスティバル映画・「ガザの美容室」上映のポスター，オリエント作文コンクールのお知らせ等を随時，掲示し，テーマ研究に関わる情報の可視化に取り組んだ。

ⅱ　中東・イスラーム，パレスチナにかかわる外部の多様な専門家との連携を図ったフィールドワークや調理実習などの体験学習の設定

イスラームを「リアル」なものとして，理解していくために，毎年，東京ジャーミー・トルコ文化センターを

訪問し，日本人ムスリム・下山茂によるイスラームの基本的特色の解説とモスクの案内をフィールドワークとして実施している。

本年は，８月に中東料理研究家・加藤貴美恵を講師として，家庭科調理室で，パレスチナ料理・マクルーバを作り，ハラールに関する解説及びパレスチナにおける食と人とのつながりについて，会食を楽しみながら学ぶ機会を設定した。

更に，９月，駐日パレスチナ総代表部からワーリッド・シアーム「大使」を講師として招き，パレスチナ問題を中心として，英語を用いての質疑応答を軸とした特別授業を実施した。

資質・能力育成をめざす「探究的な学び」へのアプローチとして，学習者の興味，関心，知的好奇心に即し，現代的な課題を踏まえた学習内容の構成と学習方法論の工夫，イノベーションを統合した学習テーマ・単元・主題を本実践では試みた。

４.「中東・イスラーム研究　～パレスチナってどのような地域・「国」～」の学習内容構成と学習展開

回数	「GC」と本時の学習テーマ・学習内容と学習活動・資料
1	【「GC」との関わり：パレスチナ・イスラームを中心とした地域，グローバル化，異文化の問題に関するガイダンス】 オリエンテーション 簡単なアラビア語による挨拶とアラビア文字を学習する。 「アッサラーム　アライコム」で始まり,「ショクラン マアサラーマ」で終わる学習。 パレスチナを中心として中東地域を調査・研究する。 中東地域で多くの人々が信仰するイスラームについて学習する。 フィールドワークや体験学習を取り入れてイスラームやパレスチナについての専門家の方と一緒に学習する機会を設ける。
2	【「GC」との関わり：他者との相互作用を通して，パレスチナ・イスラームに対する関心，視点と課題の共有】 本時の学習テーマ：中東イスラーム地域研究というテーマを選択した理由とこれから学習してみたいことを20人で共有しよう！ 横浜赤レンガ倉庫を会場とするパレスチナフェスティバルについての紹介 パレスチナ刺繍を紹介したニュース映像（TBS：N スタ）
3	【「GC」との関わり：エルサレム首都認定問題とパレスチナに関する知識と認識】 本時の学習テーマ：エルサレムってどのような町，エルサレムで今，何が起きているか，映像と新聞記事から考えていこう！ トランプ・アメリカ大統領によるエルサレム首都認定と大使館移転に関するニュース映像 池上彰・「現代史を歩く　エルサレム」(2018年6月10日・テレビ東京) 分離壁・世界一眺めの悪いホテル・バンクシーの壁画（花束を投げるパレスチナ人） 「世界遺産　エルサレム」(TBS) 放送大学：高橋和夫「パレスチナ問題」：アニメ・「パレスチナにやってきた人々」 エルサレムへの大使館移転に関して収集した新聞記事の比較・分析

4	【「GC」との関わり：異文化としてのイスラームに対する考察及び他者の視点と世界観の理解】 本時の学習テーマ：パレスチナで多くの人々が信仰しているイスラームを知ろう 「イスラム圏 ラマダン入り」(2018年5月18日・毎日新聞) 「インバウンド 聖地巡礼・5　ハラルフードが原則」(2018年6月8日・毎日新聞) 日本でラマダンに取り組んでいるモーメン・アブドゥラーさん（BS 朝日・「いま世界は」） 松原直美（文）佐竹美保（絵）「絵本で学ぶ　イスラームの暮らし」あすなろ書房 長沢栄治監修　後藤絵美著 「イスラームってなに？イスラームのおしえ」 かもがわ出版 可能ならば,「プチ・ラマダン」に取り組んでみよう
5	【「GC」との関わり：パレスチナで生きる若者に対する公平な判断と共感】 本時の学習テーマ：映画・「オマールの壁」でパレスチナの若者の姿はどのように描かれているだろうか。 パレスチナの若者がどのような生活をし，どのような悩みを抱えているのかを話し合ってみよう。 ～日本で暮らす私たちとの違いは・・・～ 「ガザの美容室」のパンフレットを配布
6	【「GC」との関わり：他者の視点と世界観を理解し，その価値を認めること】 本時の学習テーマ：中東料理研究家・加藤貴美恵先生とパレスチナ料理を作り，食からパレスチナに迫ってみよう。 食に関するイスラームのハラムとハラール パレスチナ料理のマクルーバと「万能調味料」・ザータル，主食のエイシュ（ピタパン） 八木久美子 「慈悲深き神の食卓　イスラムを「食」からみる」東京外国語大学出版会
7	【「GC」との関わり：グローバルな環境での柔軟な対応力と日本におけるイスラーム・コミュニティーに対する理解】 本時の学習テーマ：イスラーム礼拝施設・東京ジャーミートルコ文化センターへフィールドワークし，イスラーム世界に浸ってみよう 2015年4月17日・朝日新聞・「ひと　国内最大級モスク「東京ジャーミイ」の案内人・下山茂さん」 ロシア革命を逃れてきたトルコ系の人々が建設したモスクの歴史 下山さんによるモスクの建築様式・モスクを飾るアラビア書道・チューリップの文様・シェルターの機能も有するモスクに関するの説明と案内 礼拝時刻を告げるアザーンと礼拝見学 礼拝に訪れた外国人ムスリムへのインタビュー
8	【「GC」との関わり：異文化の人々と，オープンかつ適切に実効性のある意思の疎通・グローバルな環境でのコミュニケーション力・】 「難民大使」・ワーリッド　シアームさんによるパレスチナ特別授業 パレスチナの位置・地形・気候・自然・人口・料理（事前にパレスチナ代表部からの資料パンフレットを配布） 土地をめぐる19世紀末からのユダヤ人とパレスチナ人の争いとしてパレスチナ問題 パレスチナ問題に対する国際連合を中心とする国際社会の取り組みと中東戦争 パレスチナとイスラエルの２国家共存に向けての現状と課題 可能な限り英語を使って，シアームさんに質問する。

9	【「GC」との関わり：学習課題の発見とテーマの設定，メディアプラットフォームの効果的で責任ある活用と自らの「健やかさ」・「幸福度（well-being)」と持続可能な発展のための活動」 本時の学習テーマ：日本オリエント学会主催・第12回「オリエント世界」作文コンクールに，中東・イスラーム地域研究～パレスチナってどのような地域・「国」～で取り組んできた学習を振り返ってイスラームやパレスチナ問題に関して自分が思っていることやできることを「提言」としてまとめて思いや意見を発信する。 活動教室に設置した中東・イスラーム・パレスチナに関する書籍を活用する。 第10・11回「オリエント世界」作文で優秀賞・入選となった本校生徒の作品を指標（アンカー）作品として配布する。
10	【「GC」との関わり：パレスチナ，イスラームをめぐる問題に対する公平な判断，他者と円滑にコミュニケーションする力】 本時の学習テーマ：「オリエント世界作文」を互いに発表し合おう。 友達からの感想・意見を参考にして，作品を推敲し，出品する。
11	【「GC」との関わり：パレスチナ，イスラームについて深く関心を持ったことがらを効果的に表現し，伝える】 本時の学習テーマ：テーマ研究発表会にむけて，中東イスラーム地域研究の学習成果をポスターにまとめよう。 生徒が設定したポスターのテーマ ・パレスチナ問題について　・本当のムスリムの姿　・パレスチナ（アラブ）料理 ・モスクとは　・パレスチナ刺繍に込められている意味　・イスラーム世界と美術 ・平和の築き方　・特撮とイスラム文化の接点と奇跡
12	テーマ研究発表会（パレスチナ・イスラムについて作成したポスターの展示発表）
13	【「GC」との関わり：パレスチナ，イスラームについて新たに発見したことや認識が変化した点からの学習の振り返り（reflection)】 本時の学習テーマ：中東・イスラーム地域研究に取り組んできたことにはどのような意味があるのだろうか テーマ研究まとめ・自己評価

5．新聞への意見投書と「オリエント世界」作文を手がかりとした中学生のパレスチナ，イスラームに関する理解と認識からアプローチする「GC」

「GC」の育成をねらう「探究」的な学びにおいては，生徒が学習に取り組む中で感じたこと，疑問に思ったこと，解決していくことが必要だととらえたことを外部に向けて，表現・発信（out put）する活動（「感情と思考の外化」）を通して理解や認識の変容，深化に迫ることが可能となるとの仮説に基づいて，毎時の学習のまとめを再構成して新聞各社の読者投書欄へ投書する活動とパレスチナやイスラームに関する学習全体のまとめとして日本オリエント学会が実施する「オリエント世界」作文コンクールへの参加を試みた。

パレスチナフェスティバルに参加したＫ・Ｓ（男子・2年）は，ウードやタブラなどのアラブ音楽の民族楽器や民族衣装を触れるとともにパレスチナの子どもたちが描いた絵を見て，「パレスチナの子の現実に衝撃」：「一番心に残ったのは，子供たちの状況だ。小学校は破壊され，外に机といすを並べて授業をしている。日本の小学生が思い浮かべる降雨空気は旅行で使う民間機だろうが，パレスチナの子どもたちのそれは，いつも爆弾を落としていく飛行機だ。日本では自由にいろいろな場所に行くことができても，パレスチナの一部は柵に囲まれ，自由に移動できない。私たちには当たり前の事が，当たり前でないことに衝撃を受けた。」（朝日新聞・5月27日掲

載）と記述し，日本で生活し学ぶ自分との対比という子どもの視点からパレスチナの現状をとらえた。

ムスリムの生活でラマダンを学習したＨ・Ｒ（男子・2年）は，「1日ラマダンに挑戦して考えた」:「ラマダンはただ苦しいものというイメージがあったが，日没後の街はお祭りのような雰囲気になることを知った。1日だけのプチラマダンに挑戦してみようと思い立った。プチラマダンを通じて分かったこと。まず，普段の生活では気にならないちょっとした音や匂いに敏感になっていた。そして，食事をする時間は楽しいことも再認識した。・・・当たり前だと思っていたことは本当は当たり前ではなく，見えない心のくもりが異文化の非日常な体験によって少し晴れた気がする。」（朝日新聞・6月27日掲載）と記述し，プチラマダンという行動を通して，五感でイスラームを理解することを試みた。

「食」に注目したＡ・Ｓ（女子・3年）は，「「食」を通して遠い国に関心」:「先日，私は中東地域で夏のおやつとしてよく食べられる，干したナツメヤシの実を初めて食べた。甘くおいしく，今まで私の中で遠い存在だった中東地域が，身近に感じられた。」（東京新聞・7月12日掲載）と記述し，「食」が異文化理解の手がかりとなることを実感としてとらえた。また，Ａ・Ｓは，新聞の投書欄で見つけたパレスチナ問題の投書に対して，「パレスチナに関心を持って」:「「パレスチナ　支援する責任」の投書（8日）を読み，世界全体が解決に向けてさらに努力する必要があると感じた。私は学校で中東地域に着いて学び，パレスチナ料理を作ったり，大使にお話を聞いたりした。・・・中東は確かに遠く感じるが，グローバル化の中で生きる私たちはもっと目をむける必要があるはずだ。」（読売新聞・10月22日掲載）と中東・イスラーム地域研究における学びを通してパレスチナ問題を主体的に受け止める姿勢が自分の中に生まれたことを記している。

本学習のまとめとして取り組んだ「振り返り（reflection」を要約して，Ｋ・Ａ（女子・3年）は，「「中東研究」で視野が広がった」:「私の学校には，自分が興味を持ったテーマを選んで講座を受けられる「テーマ研究」という時間がある。私は，なじみのないイスラエルやパレスチナといった中東地域に関するテーマをあえて選択してみた。資料を読んだり映像を見たりして基本知識を身に付けた後は，大使や書記官を招いてお話を聞き，英語で質問をした。さらにイスラエル料理店で食事をして，食の視点から中東を考えてみた。多様性に富んでいてこのテーマを選んで良かったと思った。新聞などで中東に関するニュースに特に注意を払うようになり，自分の中に新しい視点ができたことを感じる。」と「探究」的学習における基礎的基本的知識の意味を認識し，困難を感じながらも英語を用いて，パレスチナやイスラエルの外交官とのコミュニケーションに取り組んだことが学習活動を肯定的に受け止めている。そして，「多様性」という概念の重要性と意義に気づき，自らの視野を広げる学習に主体的，意欲的に取り組むことができたと自己評価をまとめた。

このような表現・発信活動を「探究」的学習に位置づけることにより「学習意識の内面化」と「行動化」を一定程度，「質」的にとらえることができた。

（註）本稿の紙数から，「オリエント世界」作文については，駐日パレスチナ総代表部・代表であるワーリッド・シアームとの「特別授業」に依拠しながらパレスチナ・イスラームに対して抱いていた「先入観」や「偏見」について記した作品と加藤貴美恵とのパレスチナ料理実習，下山茂によるモスク案内等を取り上げ入選に選ばれた7つの作品の題名を以下に挙げるに留める。

「これって平和といえるでしょうか？」，「思いがつなぐパレスチナの伝統」，「パレスチナから学ぶ宗教戦争」，「宗教は一つになれるのでは？」，「「生まれた場所」それだけの違い」，「感じる，知るパレスチナとイスラム教」，「平和の作り方」

おわりに　本研究の成果と課題

2018年12月に出入国管理及び難民認定法が改正され，人口減少と少子高齢化の進行が進み労働市場が激しく変化していくことにより，働く外国の人々はより身近になる。そして，私たちが国内でムスリムと出会う機会が当

たり前と言えるような時代を迎える。イラク・シリアにおける戦乱による多くの移民流入の影響を受けて，多文化共生・文化の多様性の尊重を掲げてきたヨーロッパ諸国で「イスラモフォビア（イスラームに対する嫌悪や恐怖）」が広く，深く浸透している現象がみられる。2001年の同時多発テロ以後，中学・高校の社会科，地理歴史科，公民科の6カ年の学習を通して，教義を中心としてイスラームに対する一定程度の知識理解に関する広まりがみられる。

しかし，依然としてムスリムやムスリム共同体と直接的な出会いをもつことが少ない日本の中・高校生にとって，ありのままの多様なムスリムやイスラームを認識することは簡単ではない。ムスリムやイスラームに対する表面的な知識理解が，ヨーロッパの「イスラムフォビア」とは異なったかたちで，暴力的で，イスラム法規範の厳格な遵守を主張，実行した「イスラム国（IS）」は例外的で誤っている「悪いイスラーム」で，「平和」を尊重し，日本で生活し日本人を理解する「良いムスリム」との間には，摩擦や葛藤で生じることは少ないと安直にとらえようとする傾向が見られる，イスラームに対する価値判断の基準を日本及び日本人の側にもとめる見方・考え方は依然として残されている。だからこそ，モスクに代表されるイスラーム的環境，食や服装にみられるイスラームの生活規範をたんなる「調べて学習」にとどめるのではなく，人との出会いを軸として体験的にイスラームを学習することが意味を持つ。

また，パレスチナ問題についての学習では，平和構築の必要性とその難しさを歴史的経過を踏まえ，理解するとともに，イスラームやユダヤ教の宗教的・文化的特色を先入観や固定観念に基づき，独断的・断定的にとらえる「文化本質論」的見方や考え方を乗り越え，グローバル化により世界が狭くなった現代を生きる中学生が，たとえ不十分な点があるにしても，問題の解決に向かい「新しい世界」を構成していくことにつながる「日本発」の多様な見方・考え方を表出・発信する学習活動を充実させていく手がかりを探る試みが今後ももとめられる。